



「上野の森の物語」

I. 音楽と友に

2001年の11月8日、私は東京駅の近くにある会社を午後6時に出て、山手線で上野駅に向かい、上野公園にある東京文化会館における東京シティフィルハーモニーのコンサートに行った。これには一つの思い出があった。それはこのオーケストラのトランペット奏者に山田圭吾氏がいるはずであることだ。彼は私の大学時代の恩人である。

約30年前、我々は宮崎大学の学生であり、彼は教育学部特設音楽科（略して特音）、私は工学部工業化学科に在籍していた。ふたりは大学の吹奏楽部のトランペッターで、彼が一年先輩だ。このクラブには彼以外にも特音の男女学生が少なからずメンバーとしており、演奏会が近づくとメンバーでない特音の名手たちも練習に加わり、賛助出演して演奏会を盛り上げてくれた。

特音の学生たちは私から見て他の学科の学生とは異質な存在だった。大変だったがめでたく大学の入試をパスしたからには、あとはのんびり大学生活を楽しみ、そのまま大した荒波を越えることもなくいわば自動コンベアに乗って社会に吐き出されていってもある程度の安定した将来が見込めた我々とは、彼らはどうってかわって、プロの演奏家としての志を全うするためには、これからさらに様々のコンクールやオーディションに出て競わなければならない、緊迫感を失っていない学生たちだった。従って日夜練習を欠かせない毎日である。ハイレベルの実力競争の世界に身を投じた彼らにとって、すでに学生の時から、いやもうそれ以前から気の抜けない競争が始まっていたのだ。そんな連中と直に接することができたのは人の影響を受けやすい私にとって大きな幸運だった。

中でも私に大きな影響を与えたのが山田氏だった。彼は当時九州一のトランペッターということだったが、私には、自分より上はモーリス・アンドレだけだと豪語した。私が

入学して間もない頃、彼の部屋に私を招き、このフランスのマエストロがバッハの管弦楽組曲2番のフルートのパートをトランペット演奏したレコードを聴かせてくれ、最後の曲が始まると「これだけは俺は彼のように吹けない。モーリス・アンドレだけにはかなわない」と言って悔しがった。しかし彼は練習の鬼となり、ひたすら頂点を目指した。

そんな彼の真剣な練習の成果はトランペットの美しい音色、華やかな楽音となって私を感動させ、あこがれを抱かせ、私の中で芽生えつつあった向上精神を、ちょうど太陽が植物の成長を促すように高めた。彼の不断の練習の日々をまのあたりにして、私は努力すれば人を感動させ得る技術を身につけることができると確信できた。それは当たり前のことではあろうが、実際に彼が身近でそれを実証して見せてくれて初めて行動へのエネルギーとなって私を奮い立たせた。

こうして山田氏を始めとした特音学生らの姿に刺激されて、私は紆余曲折の末、好きな英語の勉強に専心した。幸い専門の化学の教科書等が英語の原書を多く使っていたので、専門科目と英語の両立もスムーズにはかれた。しかし特音学生の練習熱心が私を英語に専念させたことが皮肉にも私のトランペット修練を終わらせた。それで2年生になって山田氏に誘われて参加していた特音の学生で構成されていた室内金管アンサンブルでの活動も一年足らずで断念した。ただブラスバンドは3年生になると特音1年生のクラリネッターを好きになってしまい練習には参加し続けた。

私は楽器の練習法からヒントを得て反復練習を主体とする効果的なマスター法を模索しながら英会話力に磨きをかけ、手当たり次第英文を読みあさり、できるだけ日記は英語で書くようにし、一時は化学実験のレポートを英文で書いたりもした。またテレビ、ラジオ、テープレコーダーを駆使し、学内の英会話講座、市内のいくつかの教会の英語バイブルクラスなどに通い、自分の生活をできるだけ英語で満たしていった。こうして教育学部の英語科の先生や学生、宣教師など多くの人と知り合いになり、お世話になったり、互いに英語力を競い合ったりした。しかし私が最も強く刺激を受け鼓舞され続けた真のライバルは、やはり山田氏や他の音楽科の楽器の名手たちであった。

さて、山田氏は卒業とともに上京し上野にある東京芸術大学の音楽部の研修生となって研鑽を重ね、やがて東京シティーフィルの奏者となった。山田氏のみならず私の知る特音の学生の多くは東京芸大に研修生となるべく上京して行った。なんとか英検一級に合格できたものの2年間留年しとり残された私は、この芸大にあこがれを抱くようになっていた。地方学生として東京自体に漠然としたあこがれを抱いていたが、その頃具体的に東京のどこに魅力があるかと問われたなら、私はまず芸大と答えたろう。

だから、昭和50年春に卒業し、社会人として上京してきたとき、ほどなく上野

の芸大音楽部キャンパスに足を運んだ。その頃は私もまだ若く、大学のキャンパスに入っても学生のふりを自然にすることができた。今は上野公園の中に移されて博物館となっている奏楽堂がまだ芸大のキャンパスの中にあつたのを覚えている。塗料がほとんどはげて、みすぼらしく朽ち果てたこの音楽の殿堂はもう使用されていないようであつた。他の校舎で学生たちが練習している姿を窓越しに外からうかがいながら構内をぐるりと一周した。ある部屋で女性が和服姿で発声しながら三味線を弾いており、それが奇妙な前衛曲であつたので、そのちぐはぐさが印象的で今も覚えている。

奏楽堂はその後解体されることとなつたが、署名運動があつて上野公園の中に移築されて建物自体が重要文化財として保存されている。芸大内の奏楽堂跡地には新たに立派な奏楽堂が建てられ、これと区別するために古い奏楽堂は俗に旧奏楽堂と呼ばれている。その旧奏楽堂の中の主要な部分がコンサートホールであり、これは日本最初のコンサートホールであり、ここで幾多の名曲が日本初演されてきた。今もプロやアマチュアのコンサートが昼夜頻繁に催されており、入場券も比較的安い。芸大生等の出向演奏の時は入館料だけで質のいいコンサートを楽しむことができる。ステージの上には古いパイプオルガンがあり、これも日本最古のパイプオルガンである。チェンバロも置いてあり、毎週日曜日には芸大生が来てこれらを演奏してくれる。

私はコンサートでは演奏者の表情を見ながら聞くのが好きで、例えばピアノの演奏の時は、ピアニストの手は見えなくてもその顔が見える右翼の席をとる。私とは反対側の意見の人の方が多いようでたいていそちら側の席から埋まっていく。それでピアノ演奏を含むコンサートが多い旧奏楽堂では私はいつも右側の窓のそばに座る。ある秋の夜、そこでショパンのピアノ協奏曲を聴いていて、音楽が静かになったとき、鳩のクークーという鳴き声が聞こえてきた。窓の外、軒の下に鳩が巣を作っているらしかった。宮崎大学で私らがブラスの練習をしていた木造2階建ての音楽科校舎もそうだった。私は鳩の声につられて当時のことを思い返し、永らく会っていない山田氏らのことを懐かしんだ。そして山田氏に会おうと思えば東京シティーフィルのコンサートに行けばいいことに今更ながら思いついた。

II. 横笛吹けば 縦笛もて来し人ふたり 落ち葉の園

エンゲル係数にならって、音楽係数というものを定義してみよう。自分の支出の中で音楽関係の出費が占める割合である。そのような支出にはコンサートチケット、レッスン、CD購入、オーディオ機器購入、そして楽器の購入などがある。私は計算したわけではないが今間違いなく自分の小遣いにおける音楽係数は他のどのような出費関連係数よりも高いであろう（

会社の独身寮にいたので部屋代は安い)。故郷の三原に帰省しそれに係わる出費が大きくなる正月と夏休みを除くと私の清貧生活ではやはり音楽係数がもっとも高いものにちがいない。

私はあまり高いコンサートにゆくわけではないが、月二三回は生演奏を聴いている。フルート・ソリストの松尾麻里氏のグループレッスンを月3, 4回受けており、この先生の出るコンサートには何度も行った。その他は新旧の両奏楽堂での芸大関係のコンサートが多く、たいした出費にはならない。CDはもうたくさん買いすぎて、カセットテープとともに大きな保存スペースを占めている。それでもうこれ以上は買うまいと決心した。保存スペースといえば楽譜だ。高校時代から始まったオーケストラや室内楽の楽譜コレクション、やがてピアノ曲集も多く買ったので、これらはフルートやリコーダーなどの楽器のための教則本、曲集とともにいつも私の書棚の中で一番大きなスペースを占めてきた。

またもうこれ以上買うまいと心に決めている楽器にはつい手を出してしまう。買って後悔した楽器がいくつかある。電子管楽器はすぐ飽きてしまいほとんど見向きもしない。ソプラノサクスは長らくケースから出していない。20年くらい前地元三郷のウィンドオーケストラに参加した際に買ったクラリネットは人に安く譲った。最後の楽器と心に決めて購入した私の楽器の中では最高額のオーボエもリードの管理が面倒で数年来吹いていない。徒歩旅行の友として買った尺八は首振りが自分の性に合わなくて初めの熱は覚めてしまった。そんなわけでもう楽器を買うのはやめようと決心したが、未だに楽器店でつい手が出てしまうのは、買ってよかったと喜んだ楽器もいくつかあったからだ。

その最たるものは、秋葉原電気街のラオックス楽器館で買った竹製横笛だ。これはインドからの輸入品で400円と格安だった。それにはけばけばしい飾りがついていたが、みな取り外したので日本の横笛と同様シンプルな様になった。しかし "Musical Flute" と "C" と焼き印が押されている。また左端が開口したままだったので適度に削ったコルクで栓をした。指使いは試行錯誤でマスターして、音も2オクターブ出せるようになった。小学生の頃のこと、ある駄菓子屋で竹製の横笛を売っており、10円と高かったが、穴がたくさんあり、幾通りもの押さえ方があって、それぞれの押さえ方に固有な異なる音が出せるのだろうという、音楽よりも理学的興味から、飛行機の絵の印刷された十円札を出して買ったことがある。結局まともに音を出すことができずじまいで、つらい思いをしたのであった。今回はそれを挽回する買い物だった。サイズもコンパクトなので、ほとんど肌身はなさず携帯している。

出張、休みの日の外出時、友達との登山、たいてい私はこの横笛を携行する。最も気に入っていて頻繁に行く演奏場所は地元吉川駅のそばの中川の川辺だ。武蔵野線の鉄橋がそばにあり列車が通るときは騒がしいが、車道からは遠いので空気はいい。対岸に向いて笛を吹いていると近くで魚がジャンプし、おどけて五回の連続ジャンプというの披露してくれる。ガチャウらしいのがものめずらしいのか川面を近くまで寄ってくる時もある。

ある時女の子がふたり川べりをやってきて、それは何ですかと聞くから、横笛と言い、もう一つケーナも持っていたので一本ずつ渡して吹かせてみた。ふたりともあきらかに音楽を愛する子らで少々うまくいなくても辛抱強くてあきらめない。そのうち吐く息の具合と指の位置が呼応して音が出る。一人がかすかでも音を出すと、もう一人が自分が吹くのをやめて「すごーい」と言って脇に笛をはさみ拍手をしてほめる。互いに笛を何度も交換しながらそこにすわって試行錯誤を続けた。こちらも何とか自信をつけさせたくなって吹き方を丁寧に教えてあげる。きれいな音が出るとふたりはとても喜んだ。これは私にとってもとてもうれしいことだった。やがて彼女らは私に曲を吹いてくれと言ったので、花、モルダウの流れ、ドレミの歌などを吹いた。すると彼女らはそれに合わせて歌ったり、スキップを切り、手をつないだり離したりして踊った。ドレミの歌で私が音符を忘れてつまると、彼女らは「ソードラーファーマーレー」などと音符で歌ってくれて助けてくれる。五年生かと聞くと、「小さいから」と笑って六年生だと言って、来たときと同じように鳥のように去っていった。まるでミューズの女神らが女の子に変身して私の前に現れたかと思われるようなひとときだった。

上野公園でも何回か横笛を吹いたが、人が多いので気が退ける。あるとき龍笛か能管を練習している芸大生らしい若者がおり、その美しい音を聞いてからは私はそこではさらに気が退けるようになった。

平日の昼休みには、雨でなければ職場から歩いて10分くらいの常盤橋（ときわばし）公園に行き、リコーダーや横笛の練習をする。太極拳をするグループや石垣をよじ登る練習をする人、弁当を食べて憩う人たちが集まる。ホームレスの人たちも幾人かそこに住んでいるが、秋にホームレス同士の殺人事件が常盤橋上であってからは、彼らはほとんど姿を消した。

秋も深まったある昼休み、横笛を吹いていると、一人の中年男性が近づいて来て、私の吹く楽器に興味を示した。説明してそれを彼に持たせると、詳細に調べていたので、どうぞ吹いてくださいと言うと、懸命に吹くがなかなかうまくいかない。しかし何か他の楽器には長けている人と見たので、何か楽器をやるんでしょうと言うと、いえいえ、と謙遜し、人を待っているんです、などと言って立ち去っていった。ところが私が一曲吹き終わらないうちに、戻ってきてごそごとカバンから棒状の物が入った布袋を取り出したので、やはり同類かと思うや否や、ケーナが出てきた。吹き口部が象牙製のもので、吹かせてもらったが筒が太すぎて自分には合わない。聞くと今まで他の場所で練習していたのだが、うるさいからやめてくれと言われたとのことで、別の場所を探しているのだそうだった。そこで、「ここでは誰も苦情を言いませんよ」と言う、彼はここは斜め上をかすめて通る首都高速の「騒音がうるさいからねえ」と贅沢を言ったが、「そうか、もともとうるさい所だから、楽器の音にも苦情が出ないわけですね」

と納得した。私はここでの騒音はちっとも気にならないのだが、実はたまに臭ってくる排気ガスがいやで長時間はここで練習する気にはならず、昼休みの十数分ここにいるだけだ。時間がなくなったので私は「じゃあ、ごゆっくり」と言って先にそこを去った。

翌日、友人二人と昼休みにそこを通りかかると、彼と中年女性がケーナのデュエットをしていた。その時は挨拶をして通り過ぎた。そうか待ち人とはこの女性のことだったのかと思った。

数日後、常磐橋公園で練習していると彼ら二人がコンビニで買ったらしい弁当を持ってやってきた。離れたところで急いで食べ終わると、私の所にやってきてケーナを鳴らす。次から私も愛用のケーナを持参するようになり、三人でやさしい曲を合奏している。つい最近私はケーナーチョコを買ってこのトリオの低音部を受けもって楽しんでいる。音楽係数はまた上昇だ。

III. 歌姫

上野公園での思い出は多いが、忘れがたいもののひとつはあるオペラ歌手とのことだ。オペラ歌手といっても、オペラに出ることはほとんどなくなって、ベルマンズ・ポルカというドイツ風ビアホールで歌姫として活躍していた女性で、尾野玲子という。

もう10年余り前のことだが、3月半ばのある午前彼女から会社で電話がかかってきて、私と当時同僚だった樋田氏が昼休みに上野駅で彼女と会って昼御飯を一緒にすることとなった。樋田氏の知り合いのシャンソン歌手のコンサートのチケットを彼女にプレゼントすることが予め決まっていたこともあって、予定のことだった。そのコンサートの会場で彼女自身もコンサートを予定していたので、そこの下見をするためにもそのチケットは有益だった。

私たちは上野駅のそばの東京文化会館内のレストランに入ったが、何の弾みか樋田氏は持って出たつもりのチケットの入った封筒を社に忘れてきていた。そこで早めに食事を済ませて彼はひとり引き返した。残された二人は上野公園を散策することにした。

私は彼女と午後の上野の森を肩を並べて歩きながら、すれ違う人たちの視線が彼女にくぎづけにされていくのに気づかないではいられなかった。それほど彼女は美しい人だ。日本人ばなれした彫りの深い容貌、そして身長もあり均整のとれた体型は遠くからでも人の目を

奪う。それに声も美しいからオペラ歌手としてはうってつけだ。ある時彼女が誰に似ているかということが話題になり、玲子嬢は「笑わないで聞いてね、一番多くの人から似てると言われるのは、山口淑子」。私もそう思ったことがあり、彼女の口から言わせるよりは先にそうっておけばよかったと後悔した。そして、またある時は街灯の仄かな夜道を歩いていて、向側から来た若者にすれ違いざま、「あっ雅子様」と言われたことがあるそう。これもうなずける。

さてこのような麗人を横にしても、不思議にその時私は少しも臆することがなかった。彼女から出るオーラのおこぼれを身に受けて気が大きくなっていたのであろうか、歩きながら彼女とした会話は忘れたが、その時私は自分の大きさを初めて感じていた。

やがて公園の木立の中にあった喫茶店に入り、禁煙席に座ってしばらく話を続けた。面と向かい合っていると、彼女は視線を私からそらさない。どのような話題からそのような会話になったかは忘れたが、私は彼女の美しさを礼賛していた。それにつられたか玲子嬢曰く、「最近過去の手帳や日記をひもといているとね、私に想いを告白してくれた男（ひと）たちは平均すると月に一人くらいの割合にもなるのですよ。」彼女がその時言ったその合計数は忘れたがおびただしい数の男性がその時までには彼女に言い寄ったものだった。

「そんなに多くの人々が尾野さんを好きになったというのに、まだ独身とは…あなたが美しすぎて、それに釣り合うほどのハンサムな男性が日本ではいないんですね。」

「女は男性が思っているほどハンサムな人に惹かれないんですよ。」

「じゃあ、尾野さんがあまりに情熱的なので、近寄る男性はみなやけどしそうになって、おじけづいてしまったというわけですね。」

「私にアプローチする人は、みんなもえさしになってしまうわけ？」玲子は笑う、「私を歌から奪ってくれる人がいなかったということでしょう、私に歌手をやめさせてでも自分について来いと言ってくれる強硬な人が。」

「しかし、尾野さんをステージから奪うのはなみだいていのことではないですからね。たいていあなたの歌う姿を見たときに一目惚れするわけですから。」しかし私が彼女に一目惚れしたのは、歌っているときよりも前であった。ビアホールの中の低いステージのそばの大きなアンプの横のいすに座ってしきりに紙に歌詞か何かをメモ書きしていて、たまに目を上げて何かを思い出そうとしているときの彼女の姿に私は一目惚れしたのであった。

そろそろ樋田氏がチケットを持ってくだんのレストランに再びやって来る頃となったので、その喫茶店には長居しなかった。彼女と別れてから、私は自分も彼女への想いを打ち明けることを心に決めた。彼女が心を勝ち得た男どもの名を連ねた長いコレクション・リストをさらに1ミリだけ長くすることに寄与してあげよう、そしてこちらは我が片想い録のバインダーノートに真新しい告白のページを一葉加えようというものだ。どうせ片想いなら最高の女性への片想いは格好もつくというものだし、燃えさしになってしまっても本望というわけだ。さらに私は、愛は片想いでも完結するとも思っている。

さて、同じ告白するなら、他よりも彼女の心に残る個性的なものにしたいと思った。思い返すたびに彼女の顔面にその時の彼女の表情がそのまま再現されるような。しかしまたシンプルさも大切だ。あまり手の込んだやり方だと肝心の主旨のほうがおろそかに思われ、その手法だけが彼女を感心させかねない。私はこれらの条件を満たしているだろうと思われる方策を練り、彼女に言うべきせりふを練り上げ、これを実行することにした。頭の中で何度か告白の情景を思い描き、自分のせりふや相手の言いそうなことを反芻して準備をした。

翌週の月曜日、仕事を終えて私は霞ヶ関にあったベルマンズ・ポルカに一人向かった。月曜と火曜日が比較的すくのだと玲子嬢が言っていた。外から地下に通じる階段を降りていくと緊張が高まり、まるで考えていたこととは裏腹に、愚かな大それたことを企てているかのような思いにさいなまれ、少なくともこの場はふさわしくないぞ、と自重を促す内なる声もあり、いろいろ気持ちが揺れ動くのであった。

中に入ると、彼女はステージ上のいすに座っており、私を見つけると笑顔で会釈した。いよいよ私の心臓の鼓動は高鳴った。たくさんのテーブルが空いていたが、あえて予定の通りカウンターに座り彼女に背を向けた。オレンジジュースを注文した。彼女の歌が始まる。その時だけはそちらに顔を向ける。彼女の美しさがいつもよりこたえる。30分のステージが終わって彼女がテーブル巡りをする。私は彼女を呼び寄せるでもなく、自ずからやって来るのを待った。しばらくして私が何をたくらんでいるか思いもよらない玲子嬢が私のところに来て左横の止まり木に座る。

「きょうは風邪気味なのでビールじゃなくジュースを飲んでいるんですよ」私は実際少々喉に風邪の前兆を感じていた。

「先週上野公園を歩いたとき風が冷たかったからあれがいけなかったんじゃないかしら？寒いときに呼び出したりしてごめんなさいね」

「いえそうじゃないですよ。それにたいしたことはないんです」

会話がとぎれると、私は言った。「尾野さん、きょうぼくがお酒を飲まないのはただ風邪気味だからというだけではないんです。実は聞いてもらいたいことがあるんです。」

「何でしょう」

私はここで両手でオレンジジュースのグラスを自分のほうに滑らせながら視線を彼女の目に当てた。彼女も私を見つめている。「尾野さん、ぼくはあなたが好きです」

・・・

「え、それだけですか？」

「はい」

「ありがとうございます」玲子のものとしたげな表情が笑顔になり、彼女は得心したらしく会釈をした。

私も笑った。ジョークも通じたらしい。「こういうことを聞いていただくときにはアルコールが入っていたら失礼ですからね」

「まあ、ありがとうございます」

さすがに玲子は動じなかった。貴人のごとく笑みを浮かべることはあっても、馬鹿笑いはいしない。また感謝の気持ちも隠さない。

しかし、その後の会話は他愛のないものだった。先日このベルマンズ・ポルカに樋田氏がやって来たそうで、その帰りに他の客のコートを間違えて着て帰ってしまった。その週末の昼間に彼はそのコートを返しに店に来たのであるが、何の謝りの言葉もなく置いていったそう。そのコートを受け取った店長夫人がそのことをあとで憤慨して玲子に語ったとき、彼女は彼はそういった人なのだと弁明したという。私はうなずきながら聞いていたが、玲子の私への語り方は、女性が女友達とお互いにとっていやな人のうわさ話をしているときにありがちな上気した早口であった。このようなことは彼女としては珍しかった。

しばらくして彼女が席を去ると私は生ビールの中ジョッキを注文した。ステージではもうひとりの女性歌手がカルメンのハバネラを歌っていた。

IV. 再会

さて、11月8日、仕事を早めに切り上げて私は上野の東京文化会館に行った。山田圭吾氏を東京シティ・フィルの登場するテレビ番組「題名のない音楽会」で何度か見かけたが、彼をライブで見ることは卒業以来なかった。すでに彼も五十を何才か過ぎているからもうオーケストラから引退してしまっている可能性もあった。私はもし彼がいればコンサートのあとに会ってみようと決心した。会えれば27・8年ぶりの再会となる。

会館のロビーに入り、地下のリハーサル室に降りていく階段の所でしばらく山田氏に会えないかと待っていたが、開演の時間が迫ったので大ホールに入った。プログラムを見るとオーケストラメンバーのリストがあり、トランペット奏者の欄にはあいうえお順に6・7名が載っており、山田氏も名を連ねてあった。

開演前のブザーが鳴り、楽団員がステージに登場したが、2人のトランペット奏者のいずれも山田氏ではなかった。今宵は彼は非番かと思われ、会えないなど残念に思った。

1曲目はヨハン・シュトラウスの「ウィーンの森の物語」。私が小学校低学年の頃、母がSPレコードを一枚買ってきた。それは「美しく青きドナウ」がA面で、裏が「ウィーンの森の物語」だった。後者の中でツイターが奏でる旋律は、タイトルからの連想もあって、半ズボンをはいた幼い少年がひとりウィーン郊外の森にでかけて行って湖岸などで遊んでいる情景を私に思い描かせた。オーケストラがウィーンの森を表し、ツイターが物語の主人公の少年を表した。そしてその少年は私であった。そのような空想をしながらぼくはこのレコードを何度も聞いた。蓄音機はその頃の私の身長からは高過ぎるところに置かれてあったので、踏み台を持ってきて、この上に立ち、レコードをかけ、波打ちながら回るレコードの面を見つめ、まるで何かに憑かれたかのように飽きもせずこれらの二曲を繰返し聞いた。ジャケットにあった解説の一部もよく覚えている。ドイツ人指揮者がウィーンにやって来てオーケストラと練習するのだが、しっくりいかない。それでこの指揮者は楽団員に「シュトラウスをやろう」と言う。団員たちはおそるおそる「どちらのシュトラウスですか？」と聞く。「もちろん君たちのだ」。それからこの指揮者とオーケストラはしっくりいくようになったという。後年このレコードを見つけて調べてみると、ブルーノ・ワルター指揮ウィーンフィルのものだった。ちなみにツイター奏者は、映画「第三の男」でツイターを奏でた人だった。

コンサート2曲目のハイドンのロンドン交響曲については思い出はない。しかし予め調べたところCDを持っていた。たくさん買ったのですべてのCDを覚えてはいないのだ。MIDIにコピーしてコンサートまでの1週間ばかりのあいだ通勤などの際に繰り返し聞いてこの曲に馴染もうとしたが、余り馴染めなかった。そのせいか演奏中に私は何度か寝てしまった。

中休みの後のブラームスの第4交響曲で幸運にも山田氏が現れた。トランペットパートはやはり2人だったがいずれも前のステージとは違う顔ぶれだった。楽器も異なり二本とも巻管が水平になるバルブ式のトランペットだった。

山田氏はすぐにわかった、昔よりやや太った感じはあったが、顔立ちは変わらない。首を左右に傾けたり回転させたりして緊張をほぐす癖も昔通りだ。宮崎時代、ある定期演奏会での彼のステージ態度を批判して「あれはなんですか」と聴衆からのアンケートに書かれ、彼はすっかりしょげたことがあったが、なかなか癖はなくせないものだ。彼の技量をしてソリストやN響の奏者になれないのは、この品のなさのせいかと私は思うようになっていた。

ブラームスの第4交響曲が始まった。学生時代、ある夜宮崎市郊外のどこかのバス停でひとり傘を差して終バスの来るのを私は待っていた。濡れたアスファルトの道に映る街灯が雨滴を受けて波打つのをぼんやり見つめながら、ある女性のことを思っている。胸からこみ上げてくるものがあり、それが喉をふるわし、か細いハミングとなった。この交響曲の第1楽章の出足のメロディーだった。もし自分が彼女を得ることができなければブラームス同様自分も一生独身でいるであろう、という啓示を受けたような気がした。

曲が終わった。トランペットの特に活躍する曲でもないが、金管の響きはよかった。アンコールとして第3楽章が再び演じられた。これはブラームスが指揮して初演したときのアンコールと同じであると指揮者により説明された。快活なこの楽章を聞きながら私は山田氏との再会を改めて心に決め、曲が終わっても席を立たず、しばらく時間をつぶしてから通用門のほうに行った。外はかすかに雨が降っていたが、道が濡れるほどではなかった。また寒くもなかった。多くの団員がすでに去った頃、ラフな防寒ジャンパーを着てとても先ほどまではブラームスのシンフォニーの演奏に参加していたとは思われないような出で立ちで山田氏が現れた。

彼が楽屋口のドアを出ると、「山田さん」と言って近づいた。すぐには彼は私を認識しなかったが、「宮大のブラスバンドでお世話になった長光です」と言うと、

「おうおう、いたねー」と言って私をまじまじと見た。ニキビだらけだった彼の顔は今もそのあとが残っている。「なつかしいね、ずっとこちらにいたの？」彼の出身地鹿児島のアイントネーションもまだ残っていた。

「ええ、卒業してからはずっとこっちでした。山田さん、ますますご活躍のようで、もっと早くお会いすればよかったのですが・・・」

上野公園から上野駅に渡るための横断歩道が赤信号になったのでそこで立ち話が続く。住まいを聞くと多摩市で私とは逆方向だった。名刺交換した。「東京シティーフィルハーモニック管弦楽団トランペット奏者」とあった。名刺を指差しながらこの仕事以外には何かやられるのですか、と聞くと、埼玉県のとある高校のブラスバンドの指導をしているということだった。オーケストラの団員は生活に貧すると読んだことがあったし、尾野玲子はオペラ歌手はそれだけでは食べていけないなどと言っていたので、このような失礼な質問をしてしまった。彼も私も学生時代に抱いた高い目標は達成することができなかったが、好きなことを仕事にしている。山田氏はトランペットへのたゆまぬ情熱を冷ますことなく毎日が青春のように充実していることだろう。それに、世に貧しい芸術家はいない、という逆説もある。

私は通勤定期券が使える、彼は帰りの切符を予め買っていたのでふたりはすぐに改札を通過して中に入った。別れ際に私が求めて握手を交わした。そのとき彼の右手は指が一本足りないようだったので一瞬あれっと思ったが、それは切符をその指で押さえて持っていたからだろう。何しろ左手で楽器のケースと燕尾服ケースを持っていたのだから。

終わり

シンフォニア ひむか へ <http://p.booklog.jp/book/72841/read>

photos:

[amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro](https://www.amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro)